



なぜ、人間はいのちから文様をみいだし

その文様があらたないのちとして蘇っていったのかー

《植物文様》は増殖を繰り返しながら、無限に変容する (藤枝守)

二十一世紀塾とは 2008年度からスタートしたトークシリーズ。様々なジャンルで活躍するアーティストや知識人との話場を定期的に設置し、現在彼らが何を考え将来何を見据えているのかを引き出す、いわば二十一世紀の寺子屋です。

タイトル	二十一世紀塾 二〇〇九 no.3 「いのちの文様」 藤枝守 (作曲家) × 鶴岡真弓 (多摩美術大学教授、美術文明歴史家・ケルト芸術研究者)
日時	2010年2月20日(土) 開場15:30 開演16:00 第1部:トーク (出演/藤枝守、鶴岡真弓) 第2部:コンサート (出演/西山まりえ)
会場	金沢21世紀美術館 シアター21
料金	前売 ¥1,500 / 当日 ¥2,000 (全席自由・1ドリンク付) ※前売券をお持ちの友の会会員は優先入場特典があります。開場の10分前にお集りください。(入場時、会員証提示)
チケット取扱	金沢21世紀美術館ミュージアムショップ TEL 076-236-6072 チケットぴあ [Pコード:615-716] http://t.pia.jp/ (電子チケットぴあ) TEL 0570-02-9111 (オペレーター対応) TEL 0570-02-9999 (自動音声) ローソンチケット [Lコード:56884]
主催・お問合せ	金沢21世紀美術館 [(財)金沢芸術創造財団] TEL 076-220-2811 (交流課)

本資料に関する
お問い合わせ

金沢21世紀美術館 広報担当/黒田 事業担当/近藤、出戸
〒920-8509 金沢市広坂1-2-1
TEL 076-220-2814 (広報室) FAX 076-220-2802
<http://www.kanazawa21.jp> E-mail: press@kanazawa21.jp



二十一世紀塾二〇〇九
 No. 3 について

今回は、作曲家の藤枝守氏と美術文明史家・ケルト芸術研究家の鶴岡真弓氏によるトークと西山まりえ氏のゴシックハーブコンサートをお届けします。

藤枝は、植物の葉の表面から採取した生体情報をもとにメロディを編み出すという独自の作曲方法で1995年より現在まで《植物文様》という作曲シリーズを展開。その作品の数々はこれまで箏、笙、ピアノ、ヴォイス、バイオリン、チェンバロ、クラヴィコードなどの演奏家たちによって上演・収録されてきました。藤枝のインスピレーションの源となったのが、鶴岡真弓の名著『ケルト／装飾的思考』（1989年出版）。折しも1980年代終盤には女性歌手エンヤなどアイルランド発のポップス／ロックが世界的大ヒットを放ちそれに伴ってアイルランドに伝わる古代ケルト文化や思想にも関心が及び、国際社会でのアイルランドの認知度向上に貢献しました。日本でも龍村仁監督映画『地球交響曲第一番』（1992年）に鶴岡とエンヤが共演したこととも相まって、氏は日本におけるケルト芸術文化紹介のいわば火付け役となりました。以後も鶴岡はアイルランドに留まらず、日本を含めた広大なユーロ＝アジア世界の民族の装飾デザイン史の探求を豊かな経験と発想で精力的に続けています。

第1部では、各々のライフワークとも言える藤枝の作曲シリーズ《植物文様》と鶴岡の『装飾文様』を起点に、人間はなぜ文様を描き続けるのか？創造の源である地球上の様々な「いのち」へのまなざしとは？など、貴重な画像も交えて考察します。

第2部では藤枝守作曲《植物文様ハーブ・コレクション》から、今回初の試みとしてゴシック・ハーブのために編曲した作品を西山まりえが初演します。金沢21世紀美術館の敷地に佇む柏の樹から生まれた新曲も披露。《植物文様》シリーズに新たなメロディが誕生する瞬間です。

＊これまでの藤枝守の金沢21世紀美術館でのプロジェクト

2005年「珪藻土アートプロジェクト」能登半島の珪藻土を使用したインスタレーション&パフォーマンス。

2008年「エオリアン・ハーブ・リザウンディング～樹々をつなぐ声」

美術館敷地内の樹木を弦でつなぐサウンドインスタレーションを「金沢アートプラットホーム2008」の参加アーティストとして行う。

2008年 二十一世紀塾二〇〇八「響きの生態系～気は音に従い、音は氣に従う」

杉浦康平氏とのトークの後、砂原悟氏が『植物文様クラヴィア曲集』を演奏。その微かな旋律が夕暮れの館内と共鳴した。

プログラム

<第1部> トーク 藤枝守 × 鶴岡真弓

植物のなかの電位変化からメロディックなパターンを生み出す。このような作曲を十数年も続けている。《植物文様》というその音楽に与えたタイトルは、私の机の傍らにあった鶴岡真弓さんの『ケルト／装飾的思考』からみだしたものだ。そのタイトルのおり、この音楽は増殖を繰り返しながら、いまでも無限に変容している。なぜ、人間は「いのち」から文様をみだし、その文様があらたな「いのち」として蘇っていったのか。「いのち」と「文様」との絡み合いや反転の繰り返しが、人間のもつ想像と悦楽に縁のない領域を与えていった。今回の鶴岡真弓さんとのトークでは、「いのち」と「文様」の始原を辿りながら、文様世界に照合するような音楽の行方もさぐってみたい。西山まりえさんの演奏は、ゴシック・ハーブによって《植物文様》をあらたに紡ぎ出す初めての試み。近代が失った音の記憶を内包するハーブ。その弦にふれる細やかな指の先から、どのような響きの植物文様が編み込まれていくのだろうか。（藤枝守）

 <第2部> コンサート 演奏：西山まりえ（ゴシック・ハーブ、オルガネット）
 曲目：《植物文様 ハーブ・コレクション》から（藤枝守作曲）

1990年代から箏、笙、ピアノ、クラヴィコードなどの楽器で演奏され、展開してきた《植物文様》の作曲群。今回初めてゴシック・ハーブのために《植物文様ハーブ・コレクション》からあらたに10数曲の編曲を行い、初演される。そのなかには、金沢21世紀美術館の敷地内の「カシワ」の樹木から採取された電位変化のデータによる曲も含めている。古代からハーブはマジカルな力をわれわれに与えてきた。そのかき鳴らされた響きに誘われて、言葉が歌になり、その歌が感情を豊かなものに高めていく。中世の吟遊詩人たちに歌を授けたゴシック・ハーブ。ピタゴラス音律によって整えられたその24本の弦から溢れ出てくる響きと抑揚は、われわれの耳にとってあらたな体験となるであろう。さらに、「オルガネット」という楽器も登場する。膝にのせ、左手で鞆（ふいご）を動かして演奏されるこの小型オルガンは、中世西欧では重要な楽器だった。ゴシック・ハーブとオルガネットという2つの楽器のなかに眠る中世の響きが、時代を越えて《植物文様》にいのちを与える。（藤枝守）

《植物文様》シリーズ

1995年に始めた《植物文様》は、植物研究者であり、園芸作家の銅金裕司さんが考案した「プラントロン」という装置との出会いから生まれました。この装置から採取された植物の葉表面の電位変化のデータには、なにか音楽的な価値が内包されているのではないだろうか。そのような些細な思いつきから、実際にコンピュータ・プログラムを作成しながら、この電位変化のデータをメロディックなパターンに読みかえる作業が始まりました。それは、「なにかをみだす」という行為に集中した作曲の試みであり、また、ピタゴラス音律や純正調などの音律についての興味と絡みながら《植物文様》というシリーズとして展開しています。（藤枝守）

プロフィール



藤枝 守 Mamoru Fujieda

作曲家。カリフォルニア大学サンディエゴ校音楽学部博士課程修了。博士号(Ph.D.)を取得。純正調によるあらたな音律の方向を模索しながら、植物の電位変化のデータに基づく『植物文様』という作曲シリーズを展開。最新のCDに《クラヴィコードの植物文様》(MAM)や《Patterns of Plants II》(TZADIK)など。著書に『増補]響きの考古学』(平凡社ライブラリー)、『響きの生態系』(フィルムアート社)がある。最近は、N T T インターコミュニケーション・センターや金沢21世紀美術館、アルティアム・ギャラリー(福岡)、京都芸術センターなどでサウンド・インスタレーションを行っている。2009年2月に放映されたNHK「爆笑問題のニッポンの教養」に出演。現在、九州大学大学院芸術工学研究院教授。

<http://www.fujiedamamoru.com/>



鶴岡 真弓 Mayumi Tsuruoka

多摩美術大学教授、同芸術人類学研究所所員。美術文明史家・ケルト芸術研究家。

早稲田大学大学院修了後、アイルランド・ダブリン大学トリニティー・カレッジ留学。

処女作『ケルト／装飾的思考』(筑摩書房)でわが国でのトータルな「ケルト」芸術・文化紹介の火付け役となる。(第一回愉雅美術奨励賞受賞)。『装飾する魂』(平凡社)や『ケルトの歴史』(河出書房新社)でヨーロッパ・日本を横断する「装飾」美術の比較文明論を展開。

NHK教育テレビ「人間大学」で「ケルトから日本へ」の装飾美術を講義。映画『地球交響曲第1番』(瀧村仁監督)でアイルランドの歌姫エンヤと共演。最新刊の『阿修羅のジュエリー』(理論社)ではユーロ=アジア横断の「光と生命」のデザイン文明論を展開。NHK教育テレビ「トラッドジャパン」テキストに世界の旅と美について好評連載中。



西山 まりえ Marie Nishiyama

東京音楽大学ピアノ科、同研究科チェンバロ科修了。在学中にチェンバロの道に進む。研究科終了後ミラノの市立音楽院、バーゼルのスコラ・カントールムに留学、13～17世紀にかけての中世およびルネサンスの音楽を学ぶとともに、ヒストリカル・ハープもM.ガラッシ、H.ローゼンツヴァイクに師事。卒業後は、コンチェルト・ヴォカレやアンサンブルフェラーラのメンバーおよびソリストとして活躍する。2002年に帰国。現在はチェンバロとハープの両方を操るソリストとして、また古楽アンサンブル「アントネッロ」のメンバーとして活躍中。邦人としては類のないヒストリカル・ハープ奏者としても、演奏や録音活動、後進の指導にあたっている。

藤枝守
＜植物文様＞関連CD

1



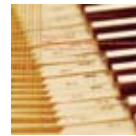
2



3



4



5



6

1 「Patterns of Plants」(TZADIK 1997)

2 「箏組曲～植物文様」(ALM 1999)

3 「植物文様ピアノ曲集」(音楽之友社 2000)

4 「今日死ぬのにもってこの日～植物文様ソングブック/響きの文唱」(FONTEC 2008)

5 「クラヴィコードの植物文様」(Milestone Art Music 2008)

6 「Patterns of Plants II」(TZADIK 2008)

鶴岡真弓
著書(代表作)

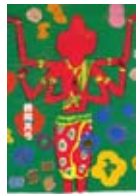
1



2



3



4

1 「ケルト／装飾的思考」(筑摩書房 1989)

2 「装飾する魂」(平凡社 1995)

3 「ケルトの歴史－文化・美術・神話をよむ」(共著 河出書房新社 1999)

4 「阿修羅のジュエリー」(理論社 2009)

西山まりえ
CD(代表作)

1



2

1 「トリスタンの哀歌」(レグルス 2006)

2 「J.S.バッハ:インヴェンション&シンフォニア」(Anthonello Mode 2008)

※上記プログラムについて、貴媒体にて広く掲載・周知いただきますようよろしくお願い申し上げます。

※プロモーション映像は、web (<http://www.kanazawa21.jp/>) をご覧ください。

※写真をご希望の場合や当日のインタビュー及び取材をご希望の方は、広報室までお申し付けください。お待ちしております。